

大教正立位下景端校正

少教正并國心正譯釋

# 神理概論便譯解 完

明治十七年

十二月出版

朝陽堂藏版

神理概論便譯解序

神理概論何の由より此書を出版せしむる

教祖遺教の神理を論述するものにして

遺教の神理を論述するものにして

遺教の神理を論述するものにして

遺教の神理を論述するものにして

遺教の神理を論述するものにして

遺教の神理を論述するものにして

朝陽堂



靈強服秀勢大尊聖教の以て  
 一面新なるべきを誰か解るべきに非ざる  
 幸や其の意を以て種々の戒を盡し  
 師の意を承るべきを天意の旨を以て  
 是の如き書を撰ぶべきの大業を以て  
 意を盡すは其の業の階級の意を以て  
 禪のこころを以て其の業の意を以て  
 あるべきの修を以て其の業の意を以て

一と  
 之書  
 の微素子  
 末旨の教書  
 すと

明治十一年二月

神宮黑位女

中議殿正元寺達謹撰



少海殿正元寺達一書



凡例

一此神理概論の本文（ほんぶん）は

教祖神遺教中の緊要（けんよう）

なる教語（けうご）を親灸門人等の編纂（へんさん）一枚摺（いちまいずり）と為（な）

して本教確信の教徒の必讀（ひつどく）の為め世小公小（よこやくよこやく）

せしを猶衆徒の中（なか）ハ其意了解（しよがいりやく）難（がた）き節々（せつせつ）

あるを以て今回更（あらた）ニ本文（ほんぶん）をも校正（けうせい）一俚諺（りげん）も

注釋（しゆしやく）一其意を了得（りやく）為（な）さしむるを要（もと）とし

一本文中校正（けうせい）一たる文（ぶん）ハ正直（しやうじき）ハ神意（しんい）なり神徳（しんとく）

神 祀

朝陽堂 車陽堂

ありと有りしを正直ハ水火兩靈の神徳よ  
 てと改め又(生々養無の心法朝昏練磨精修を  
 へしと有りしを練磨精修を所以ありと換  
 へ又増加したる文ハ(本派確信の教徒)とあり  
 一 本派の上は故よと云ふ二字を加へ又(天よ  
 任す)とハ教徒たらむ者のとありし天よの上  
 よ我といふ一字を加へ教徒たらん者の(の)を  
 ハよ換へたり依て是よ校正を告ぐ者者此意

を諾へ  
 一 註釋文の傍訓ハ上下よ通暢易きを以て直讀  
 とせり  
 追告本文中(其我を離きたる無念)とあり  
 一を誠の一字よ改めたり

申

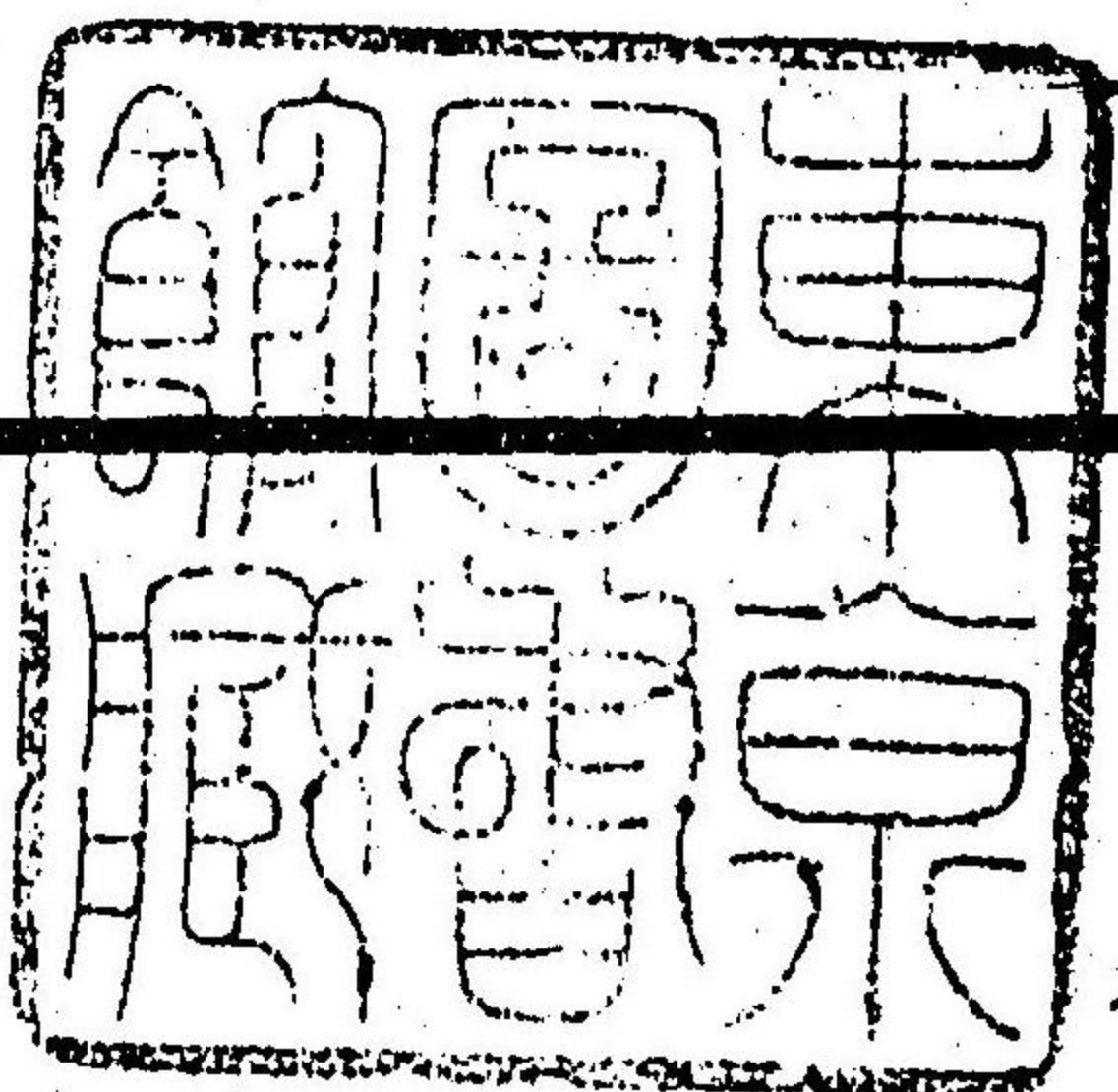
〇二

月易堂

神 不

神 陽 堂

神理概論俚諺解



大教正五位森下景端 校正  
教祖神遺教親灸門人等傳習 謹述

少教 正片岡正占 註釋

謹つとて惟たゞるに我わが神道しんたう黒住派くすまゐの教法けうほふハ源流げんりゆう一派いっぺいを  
為なす多岐たぎ小渉せうしやうらば能よく教祖けうその足跡あしせきを履踐ふみ能よく  
教祖けうその御心ごこころを以もつて心こころとまをるを眼目がんもくとし

申

一

月 陽 堂

此段ハ此神理概論を記せる門人等の意見ニ  
 テ黒住派ハ他神道の教法トハ其依テ起リ  
 源流の異なる趣旨をかき出志しものなり  
 源流一派トハ本教ハ教祖宗忠神自然の天授  
 不て感得たまひ不測の靈驗を教へ給む  
 不より天命直授の教法トハ稱まなり故不神  
 道の教法他教と異りて多岐小涉らば一派の  
 教法おまば此左京が瀬踏を致す皆々付て御

出るさまと説給ひ其足跡に従ひ教祖の御  
 心に背のぬやうに道の修行をする事を目的  
 とするが將佳と云の竟見なり源流一派多岐  
 等ハ瀬踏の伏案なり  
 教祖曰心正直にして明のたまはば日神の御心と  
 一體なり日神の御心と一體ある事を知れば其  
 陽徳小化育せらまて萬物生々の道理自ら覺悟  
 する所あるべし

此一段ハ本教教旨の起因を擧て神理の大躰  
 と示したるものなり御小傳の中凡天地の  
 間小萬物生々たる其元を皆天照大神なり是  
 萬物の親神よて其御陽氣天地に遍満り一切  
 萬物光明温暖の中小生々養育せらるる息む  
 時なり實難有事なり各體中ニ暖氣の有る  
 ハ日神より受て具へたる心なり心ハこぼる  
 と云義ふて日神の御陽氣が凝結て心と成る

かり人欲をささり正直小明らかるまバ日神と同  
 心なりとある文意を能々味ふときハ覺る  
 所あるべし○正直の正ハ水の本体ふて横小  
 平りぬる事を表し直ハ火の本体ふて豎小轟  
 りなる事と表し陰陽和合の妙味を含める也  
 り此一段ハ本教修行の工夫を勉むべき緊要  
 の柱礎なり

又曰く教ハ皇大神の御教道ハ日神の大道造物



主しゅハ日神ひのかみの働いそぎ一切いっせつ萬物ばんぶつ光明くわうめい温暖うんぬんの中うち小養育せうやういく  
せられて生な々息いきむ時ときるらとの教傳けうでんあり

此こゝろ一段いちだんハ本教ほんけうの三綱さんかう領りやうよて教旨けうしの在ある處ところ神

理りの生なずる所ところなり又曰またいひくとハ教祖けうその御詞みことごを

再またじ掲かぐるを云い教けうハ皇大神みかみの御教みことごとハ書紀しよき

神代卷下かみよりのまきしたハ天照大神あまてらすかみ手持寶鏡たのたまひ授たま天忍穗耳尊あまの忍穂耳尊

而祝をたま之を曰いひ吾兒視われをみ此寶鏡このたのたまひ當猶視あたはなほみ吾可與われととも同ひと牀とこ共ども

殿との以為を齋鏡さいけい又勅またたま皇孫みかみ曰いひ葦原あしはら千五百秋ちひさかぜ之瑞穗のすい

國くに是吾子孫われの子孫可主たま之地のち也宜爾皇孫あたはみかみ就而治たも馬行まゆり

矣寶祚たのたまひ之隆のたか當與あたは天壤無窮あまのちから者矣此二訓このふたごころハ父子

有親ありの親愛のちかと君臣みかみ有義のちかの大義のちかと小係のちかさるら彝

倫のちかの大綱のちか萬古不易まごころの神勅かみ即すなはち皇祖みかみの豫言のちか小

まま一ひと刀た一ひとて天壤無窮あまのちからの寶典教たのたまひの由よして生なずる

所ところるりらの道ちかハ日神ひのかみの大道のちかとハ自然しぜんの天造あまの地

化まふて道ちかの開ひらけ行ゆく様さまを示しめ給たまひ給たまひ教語けうごを

り天照日あまてらすひの大神かみ地球ちきう上うへ小照臨せうりんを給たまふや光ひ

明温暖の大氣天地小遍満り四時行も萬物化  
 成する生々自然の養育實小息む時るく圓頭  
 方足よして知覺を存し不測を躰とし妙を用  
 とせるもの誰り斯道小由らざるを得むや道  
 ハ大路の如くよして萬人の由る所之を日の  
 神の大道とハ稱せるなり○造物主ハ日神の  
 働らばとハ外國よ云造物主とハ少しく異  
 る所あり畏くも日の神の働きとハ光明温暖

の功用を稱し給ひしものなり前段の註釋小  
 も掲げし如く天照大神ハ萬物の親神とある  
 ハ其照煦為し給ふ光明温暖中より萬物を産  
 み出すを云實し宇宙の間し比較するし物なる  
 無上尊大ある圓靈の活動是なり御形も係る  
 の御名ハ即ち天照大御神○一切萬物より以  
 下ハ前に註釋せるを以て是も贅也  
 是此教傳ハ正直の誠を以て本と爲誠ハ人の心

性せい不ふ寓ぎする神しん徳とくよして道みちの誠まことハ正直しやうじきなり正直しやうじき  
 ハ水みづ火か兩りやう靈りやうの神しん徳とくよして天てん意い人心しん二につ無なき更さら  
 何なんの疑うたがひら之これ有ある維えん我が神しん道みち神しん理りの存ぞんずる所ところよ  
 して我わが教けう徒たう畏い敬けん尊そん信しんするの教けう法ぽうなり  
 此こ段だんハ教けう旨しのこ小せう結けつ束そくよて水みづ火か兩りやう靈りやうの妙めう用よう天  
 意い人じん心しん二につああままを證あきし神しん人じん不ふ二に幽ゆう顯けん一いつ致ちの  
 蘊うん奥おくよ溯さうる伏ふく案あんなり正しやう直じきの誠まことを以もて本ほんと以もて  
 とハ御ご小せう傳でんに人じん欲よくを去さり正しやう直じきよ明めいららああままハ

日ひ神しんと同どうト心こころなりとある御ご詞ことばよ依よりて記しえし  
 ものあり○誠まことハ人ひとの心こころ性せい不ふ寓ぎする神しん徳とくよ  
 てとハ日ひ神しんより受うけ具ぐへたる心こころの徳とくハ即やがて  
 神しんなり其その神しんが即やがて誠まことなりと云いふ義ぎあるべし  
 ○道みちの誠まことハ正しやう直じきなりとあるハ斯この道みちよ誠まことと云い  
 ふハ正しやう直じきを根もと據とせしものぞと諭さとせる詞ことばな  
 り○正しやう直じきハ水みづ火か兩りやう靈りやうの神しん徳とくとハ正しやう直じきハ即やがて  
 日ひ月げつの御ご心こころなりと諭さとさまたる意こころあり○神しん徳とく

ハ至公至大より天地の間不塞る光明温暖  
 の大氣萬物を化育するの妙を云ふ○天意ハ天  
 照大神の御心の誠を指す人心ハ大神より受  
 得たる大神の御分心の誠と云ふ意なり○二  
 つなき夏何の疑ひり之あらんとハ神人不二  
 の御教疑ふべうらほと云ふ伏案なり○維我  
 神道神理の存する所とハ吾教祖の説給へる  
 神道ハ此神人不二養無一誠の神理存して

あるが故小畏敬尊信すべき教法ぞと稱賛て  
 本教の大旨ハかくの如きものと舉て教徒  
 一示論せるもの也

夫ハ天地の造化ハ天日の陽徳不照照せられて  
 萬物自ら化生一本派は稱する一神萬神々々一  
 神の神徳神功逐次は相擧り天地否の妖氣漸く  
 消散して地天泰の祥雲稍や靉隸き今日の開明  
 を成しハ幽顯一致神人不二の名教因て起る

偶然ニ非ざるあり

此一段ハ端を改め造化自然の妙用世運の進歩時勢の隆替自ら開化文明ニ赴く徴候を述べ名教の興る所以を序でしものよて日神の大道と造物主の働きの二義を并釋して斯道の萬道に勝れたる所以と造化自然の妙用とを論述せしものあり○夫とハ發端の辞あり天地の造化とハ古語ニ所謂天地位焉萬物

育焉とある其自然の妙用ハ云々ある理あるものぞと云ふ意なり○天日の陽徳とハ天照

大神の御徳よて即ち光明温暖の化育を云ふ照煦とハ明照温潤の功用を云ふ意なり萬物自ら化生しとあるハ前条も既ニ論へる天照大神の陽徳即ち光明温暖の活用寐ても寤ても忘らまざる難有き尊とま事を稱賛せしものあり○本派ニ稱する一神萬神々々一神

の神徳神功逐次に相擧りとある一神ハ天照  
 大神を申萬神とハ八百萬神を云ふなり今ハ  
 百萬神と分ちハあまとも其本ハ天照大神の  
 一神あり其一神の陽徳ニ照照此て八百萬神  
 と成り萬物と化生せる神徳神功と云ふ意  
 り神徳ハ恩恵ニよて神功ハ成績なり逐次と  
 ハ次第と云ふ義あり相擧りとハ万物の整  
 ふを云ふなり是迄ハ日の神の大道造物主の

起因を説き次ニ日神の大道其妙天地自然の  
 開化ニ論及せしものなり○天地否の妖氛漸  
 々消散一とある天地否ハ易の卦名なり天地  
 否ハ乱世の象ニて天高く上り地低く下り上  
 下離隔て事情上下ニ達せざる之を否と云維  
 新前の景象あり又病氣ふて云ハ病瘡の病  
 ニて陽尤り陰滞る時ハ元氣竭て人事分らざ  
 るが如きを云ふ誠の心傳ニ陽氣ゆるむと陰

氣強るるり陰氣勝時ハ穢かりとあると同ト  
 義ふり此故事を引たるハ吾本教の教旨徹上  
 ざる餘意をも含めり妖氣ハ邪氣を云是  
 此比喻よて我國も保元平治の喪乱以来王綱  
 紐を解き皇維紊乱せハ恰も妖氣の否塞り  
 たる如き景象れり一ハ維新以来其妖氣漸く  
 消散して今日の昭代ニ立復る氣象を云へり  
 たり地天泰の祥雲稍や變隳すとある此地天

泰と云ふも同トく易の卦名ふて地天泰ハ泰  
 平の象よて降下る地氣上り位一昇騰る天氣  
 下り位一天地相感應一ニ氣相交通する之を  
 泰と云維新以後の景象よ一て本教も隆昌一  
 向ふの前兆かり四時行えれ百物成るハ陽徳  
 長トて陰氣消する時勢の隆替消長せると同  
 一理かり保元平治以来の妖氣消散して明治  
 今日の祥雲變隳て稍蒼生の疾苦を免るゝと

云ふ義あり祥雲ハ日出度雲るり變隸きてと  
 ハ邪氣退散し祥雲鬱葱なるを以て泰平を象  
 する形容詞にて治乱變遷の模様を如此陳述  
 しものあり是吾本教の隆昌も天地否の厄運  
 より變遷の比喻ニ如此書きたるものよふむ  
 ○今日の開明を成しとハ前記の如く隆替消  
 長の變遷ありて遂ニ維新の御世と成りて萬  
 般御改革小成の時よ至ると云ふ意あり○幽

頭一致神人不二の名教（本）因て起るも偶然ニ  
 非るふりとある幽頭一致とハ幽界も頭界も  
 一致して何も替る事無しと云ふ義あり神人  
 不二と云ふハ神も人も同根同体して二つの  
 ものよあらばと云ふことあり名教とハ天照  
 大神より教祖の神へ不思議の神傳ありし稱  
 辞ありとまを本教として所謂日神の大道と云  
 ふ此大道も維新以前ハ否塞の事多うりしが



維新以後ハ祥雲變隸テ所謂陽氣旺盛の時至  
 リ斯道の開け行べき世と成りしれ共又浮薄  
 輕燥の時弊起らざるを得ず之を矯正せる名  
 教の興るハ全く神議よて偶然の事ハある  
 事トとの意あるべし

嗚呼幽顯一致神人不二の教傳ハ假設の神理  
 非ずして我國固有の神理を存する真教あり  
 此段ハ承前起後の詞よて本教ハ假設想像の

神理ニ非ず所謂惟神の神道たるを證明せる  
 ものなり嗚呼とハ歎美の辞あり幽顯一致神  
 人不二を前段ニ既にいへるが如く本教の教  
 語なり此教傳ハ他教と異して人造の假  
 設けたる神理ニ非ずして我國ニ皇大神の傳  
 へ存置給ひし神教の神理固有の真の教あり  
 との意あり

故ニ本派尊信の教徒確信貳なく生々養無の心

法朝昏練磨精修する所以なり

本派とハ黒住派の事にて派ハ明治九年別派  
獨立を允可一時の名あり一が明治十五年十  
一月二十二日改稱して今ハ神道黒住教と改  
めらる一あり○尊信の教徒確信貳ふくとハ  
當教ニ神文を捧呈一年來一意ニ成り貳心ふ  
く本教を確く守信仰する所以のものハ生々  
養無の心法離る、一忍びざるの實あるが故

あり爰グ惟神の神理を存する真教と云ふ義  
あり○生々養無の心法とある生々ハ日月兩  
靈の活物本教にてハ生通一と訓む光明温暖  
の陽徳あり養無の無ハ有無の無一非びして  
光明温暖の大氣ハ目一も見え手一も取ま  
ざれ共萬物を化生の良能あるを以てまきを  
靈無と云故一此靈無を養ふを本教の主眼と  
し心法ハ心のもちあこと云ふ爰なり朝昏ハ

あさをむを云ふ練磨精修とハ心も身も清淨  
 一して御陽氣を戴き心を養ひ面白く樂しく  
 難有き一心に成りて修行すべしと云ふ意  
 然る時ハ生通の道に至らるゝそとの義を  
 かく示したるものあり  
 然り而して我教法と教と道との差別あり  
 此段ハ前段を承て教と道とハ區別ある所以  
 を示したるものあり然り而してとハ前段の

生々養無の心法を心得然して教と道との差  
 別ハ次の文にて心得べしとあり  
 誠を取外する天に任せよ我を離れよ陽氣は成  
 活物を捉えよ此五個を以て教の順序とい  
 此段と次段とハ教と道との細目を擧げて源流  
 一派の教脈を記すものあり此段を本教と  
 してハ教の五度と云ふ義解下條本文に明く  
 是を此所に贅び委しくハ其處に付て并知す

一

道の順序ハ誠を取外さる活物を捉えよ陽氣よ  
ふ我を離さよ自然よ任せよと云ふ五個よ  
て恰も環の端なきが如く幽頭一致神人不二の  
妙用を含めり維我宗家相傳する所の教祖口授  
の教語あり

此段ハ道の順序を立て記したるものよて教  
も同トく五個よして恰環の端なき様ありと

美稱一ものあり幽頭一致神人不二ハ既よ解  
り維我宗家相傳する所の教祖口授の教語な  
りとハ神道黒住教々祖宗忠神より二世三世  
へ相傳へらる、教語よして他教よ其類なき  
を云ふ

爰不天不任姿と自然よ任まとの區別を分解す  
礼を天よ任すとハ我教徒たらむ者ハ行住坐卧  
患難流離の際一己一身よ係る修行上の教規よ

して  
 此段と次の段とハ天造人為皆造化化成の妙  
 又歸するを示ししるものなり行住坐卧ハ立  
 ても居ても寝ても覺てもと云ふ意なり患難  
 流離ハ病患死難又逢ふとも分散退轉の災厄  
 又罹りてもと云ふ意なり一身一己ハ自分の  
 身の上の支なり斯の如き憂き目又逢ふも皆  
 天より我又修行を仰付らる、天の試験と思

以諦視よと宣給ひ一教規ありとの意あり  
 自然に任すとハ之を小よまを日日の行為樂  
 天安命之を大よすを況く世上を大觀一時勢  
 を知り氣運を審よ一奉教修道の真理を擴充一  
 時中するの道規あり  
 此段ハ前段を受て天よ任すと自然に任すと  
 の區別を細論トて奉教修道の要ハ時中の二  
 字よ止る事を諭ししるものなり日日の行為

とハ家業世渡りの志ありとて日難有た  
 取外さぬやうに足るをいり已が受得  
 天の御擬作を大切し勤むるを云ふ樂天安  
 命とハ天道を樂し行も帰るも生るも死ぬ  
 るも天命有無生死の四苦も天命おれば其天  
 命といふ事を悟り得る時ハ本心定るか故  
 安心ありと云ふ意なり是迄を自然に任  
 小を云ふ大を語まば沈く世上を大觀すまば

治乱興廢ありて世の變遷する有状を觀察す  
 るを云ふ時勢を知り氣運を審しとハ譬  
 へバ更始一新廢藩置縣と成りも天時あり  
 と心よ了解するの類を云ふ又奉教修道の真  
 理を縮言すまば解除一誠なり解除とハ身も  
 我も心も抛棄するを云一誠とハ誠一つ止  
 り之を擴充るを云時中するとハ過不及  
 くして時處位の中道を得るが時中するの

道規ふりと云ふ意ハ信心堅固ハ朝旨を遵守  
 一吾本教を固守て生生の真理を明悟て斯道  
 の天然自然の時至り頭を開くる中其道  
 規ふりと云ふ義あり  
 格言云く言淺くして旨遠きものと善言あり  
 と夫是等の謂あり  
 格言とハ古人の言置くる詞の道理ニ適ひ法  
 規ニ違ハぬを云ふ言葉ハ淺淺として能く

聞て見まハ其旨意遠く深きハ善言ありと云  
 ふ古語の意あり此ハ前段の教規道規をさ  
 て稱歎せしものあり  
 又誠を取外まると云て教祖の心ニ悪しと知り  
 ながら身ニ行ふ事の無き様ニ為む神とあらる  
 べしと思量き給ひしを云  
 此條より以下の四條ハ教の五事ニ證左ある  
 事を擧て示しするもの也此條を神人不二天

地一体の誠を勤めて神の行ひを為し信心自  
 修して心は神を拵へ神はふる執行を示した  
 る教語あり是則ち幽顕一致の神理よりて尤  
 戒慎恐懼べき要旨あり

天は任すといは壽限の際心衷は天命と覺悟為し  
 給ひしを云

此條ハ御小傳中ハ文化九年の秋父母共ハ痢  
 疾よて暫り七日の間ハ神退せしりハ教祖悲

哀給ふ夏大方ならず遂癆瘵の病を煩ひ文化  
 十一年の春に至り壽限は云云とある文意を  
 抜抄して天は任すの眼目を記したる教語な  
 り誠の心傳は只何夏も天は任せ此世は置  
 て入用はふる小子から御引取とふるべし又  
 世の為は少くても相成ものならば快よく相  
 成と存候處不思議ハ相直り候の事から初  
 よりまどふひとをもて奇妙成る事甚多く全く



御陰と奉存候とある文意をも合せ見て天に  
 任すと諭し給ひし要旨を并知すべし  
 我を離るゝと終焉に臨み従容として死を決  
 し給ひしを云

此條も教祖神の我を離る給ひしを諭し以  
 て世人に我を離るゝと記し如此心得よとの  
 教旨あり初條に誠を取外さぬハ心は神を持  
 へ神に成る修行を示し給ひ其神に成る修行

を為んと思へば天に任はる心よあらざれば  
 神に成る度能へば天に任はる心よ成らんと  
 思へば我を離るゝが天に任はる度能へざる  
 順序を能々味み見べし是即心のこよして  
 形を忘るゝ形を忘るゝが即ち我を離るゝか  
 りとの意なるべし

陽氣よふきとハ陽氣よあるなら病ハ自ら愈  
 づるものと思惟し心を養ひ給ひしを云

謹で惟るよ教祖ハ安永九年十一月廿六日冬  
 至一陽來復の辰を以て降生給ひ文化十一年  
 冬至の旦御蔭を受給ひハ實ニ偶然ニ非  
 夫十一月ハ陰氣極り盡て陽氣地下ニ萌  
 たり依て一陽來復の辰と云然も冬至の日  
 ハ一陽始て地下ニ生ト萬物始めて地上ニ萌  
 一を生ずる天時を得る辰なり此時ニ生るハ  
 者ハ窮乏難義すと雖ども誠實ニ一て堅固ニ

其分を守まバ次第ノ人の助け有て諸願發達  
 成就疑ひ不現なり是教祖此時ニ降生給ひ大  
 難病を受給ひハ陰氣極り盡き給へるなり  
 然もとも陽氣地下ニ生むる時あるを以て遂  
 一其大難病をも凌ぎ給ひ冬至の旦大陽を拜  
 一給ひ一時陽氣胸間ニ徹一難有く嬉しく思  
 へび日光を吞給ひ心氣頓ニ快活此時天地生  
 生の靈機を自得給ひ一たり此意を能々伺ひ

奉りて此一條の教語の難有此事を悟るべし  
 活物を捉えよとて心氣快活天地生生の靈氣を  
 自得之給ひしを云

此條の活物と云ふハ恐くも天照大神の本熱  
 よして道の本体誠の元素あり其誠の妙用即  
 ち活物あり其活物を取も直さず天照大神の  
 御心あり其御心が即ち宇宙に累積る光明温  
 暖の御陽氣あり然る故に前條に陽氣に成る

と諭し給へる天地の活物を御陽徳あり其陽  
 精と陰靈が凝結て人の身心と成るるあり然  
 りすは神人一体なる何の疑ひの之あらむ  
 故に教祖ハ形ちの支を忘る本心の誠一に成  
 て能く靈無を養ひ給ひ面白く樂しく信心怠  
 り給へざりしより陽氣を身体に充め給  
 ひしが故に天地の活物を捉え給ひしあり依  
 て世人もあらく心得よとの教語を傳へ給ひし

事を能々明悟して天地生々の元氣を養營胸  
 中の雜念を除却よと示し給ひ一かり  
 此五個を以て源流一派の濫觴と為す故に道を  
 信ずるよハ先心よ悪しと思てハ身一行ハざる  
 様よ更々物々反省て誠を取外さむ天よ任せ我  
 を離れ陽氣よあり活物を捉えろが即ち足跡を  
 履踐の順序よして教と道との因て生ずる所な  
 り

此段ハ教の五事を収束教の起因を叙列て道  
 の生ずる所以よ論及せしものあり此一段を  
 教の五更を以て教祖の此左京が瀬踏といふ  
 以皆々付て御出なされと導び給ひ一足踏  
 を履み踐ときハ神とあらるゝとの教意を陳  
 述しものあり此五更の順序よ因て道の生ず  
 る所以を提起しものあり次条を見て并知せ  
 べし

教たう立たつて道みち生なず道みちハ名なあり其その本ほん体たいを誠まことと云い誠まことを  
 天地てんち生な々々の元もと氣きあり其その元もと氣きが活い物ぶつよて活い物ぶつと  
 ハ陽やう氣きあり陽やう氣きよあるよて我われを離とる、より善よ  
 きハ我われを離とる、と自然じぜんは任ますより善よさそ  
 へ其その我われを離とる誠まことが本ほん心しん自然じぜんの活い物ぶつあ  
 り  
 教たうハ前まへ段だんの五ご支しよて御ご小せう傳でんよ教たうハ天てんより  
 起おこりとあるハ是こゝの謂いふあり道みち生なむとハ道みちハ人ひと

の由よしる所ところの名なあり教たうよ據よらざれば其その道みちを履ふ  
 む事こと能よて道みちよ依よらざれば誠まことの門もんよ及および堂だう  
 上のほり室しつよ入いること能よてざるハ自然じぜんの道みち理りあ  
 る支し云いふを俟まちざるあり然しかる故ゆゑよ教たう立たつて道みち生な  
 ずとハ書かきしものあり斯この道みちよ於おいて道みちと云いハ  
 只ただ名な目めよて其その道みちと云いもの、本ほん体たいを誠まことと  
 云いふ意いあり御ご小せう傳でんハ自然じぜんと天てんより顯ある  
 ありと示しし給たまへるを思おもふべし天地てんち生な々々の

元氣ハ即ち天照大神の誠を云ふ義あり其  
 誠が直に活物其活物が直に神あり其神が直  
 に誠ありとの義にして所謂環の端無き如  
 き妙用自在の神徳あり依て道の順序ハ誠を  
 取外する活物を捉えよ陽氣に成る我を離し  
 よ自然に任せよと諭し給ひ一あり然るを陽  
 氣にありよハ我を離して自然に任すべしと  
 ありはりせば本心自然の活物を捉えたるか

り其捉えたる活物が即ち誠の本体天照大神  
 なるは神人一躰にあり修行が即ち斯道の要  
 目ありと云ふ意あり

我を離れたる効験を知らんと要せば心が  
 石の如く鎮ると云の教語を味へよ活物を捉え  
 たる効験を知らんと要せば氣分が朝日の如く  
 勇ましく成ると云の教語を思へよ心大磐石の  
 如く鎮り氣分朝日の如く勇ましく快活なる時

ハ萬物生々の神理自ら明悟する所あるべし  
 此一段も前段の道の順序を履み我を離れ活  
 物を捉える方嚮を指授す一要語なり身を自  
 然に任せば我を離れたるなり心を陽氣に成  
 せば活物を捉えたるなり其効驗の如何を知  
 りんと思へば心が大磐石の如く鎮ると氣分  
 が朝日の如く勇ましくあるといふ教語に依  
 て勤考せるとさへ此要領の意明り悟らむ

神理自ら知らるゝものぞと云ふの義なり  
 其心鎮り氣分勇ましく中より浮み出るの一念  
 が本派嫡々の真教天道自然なる正直の誠より  
 て日神の活動萬有の元素なり是之を本派神道  
 神理に入るの門とす  
 其心の鎮るハ自然に任せたる効驗なり其氣  
 分の勇ましくなるハ陽氣にありたる効驗と  
 了得たると此ハ心の鎮まると氣分勇ましく

其中より自然しぜんに浮うき出いる一念いちねんの誠まことと云いふ物  
 が黒住派くろぢまゐに於おいて専主義せんしゆぎとする所ところの嫡まこと々不  
 易えきの真教しんけう天地自然てんちしぜんの道理だうりよりして想像さうざう假設かりせつの  
 神理しんりに非あび自然しぜんの活物いきもの水火すゐ兩靈りゆうりやうの妙用めうりやうを具  
 有いせる正直しやうじきの誠まこと即すなはち天照大御神あまてらすおほみことの御心みこころの本  
 躰たゐ萬物ばんぶつ一体いつたいの元素げんそを云いふ事ことあり本教ほんけう尊信そんしんの  
 教徒等けうとらうへ信心しんこん自修じしゆして斯道すみちの門もんに及およぶ針路しんろ  
 を指授しきじゆする神理しんりの概畧がいりやくを論述ろんじゆつありしものあり

看みむ人ひと能よく此意このいを了解りやうかいすべし

神理概論俚諺解

終



神理繁論俚諛解跋  
 大凡天下萬物造化無不神理  
 天地日月君臣父子皆以神理  
 之功用而成以行其常道其神  
 之為言伸也至明至靈具象理  
 而應萬事者也欽我教祖則天  
 命敬神道以教后生明察前聖  
 之所未發處以成天地之一大

教法也親炙門人森下老師承  
 教祖之訓詁以成一篇名曰神  
 理繁論使此本教學徒為學道  
 之要覽今雖云繁論宗備神理  
 之全焉然愚夫愚婦或未詳於  
 其文談句趣似難解釋由是罔  
 先生亦以俚語一一解釋以示  
 男女論辯簡易可以為斯學之

指南矣余一覽關心甚欽慕乃  
 忘拙謹識

后學大朝鮮國安駟壽謹  
 跋敬書于本局

和

車隱堂

明治十七年十一月十九日版權免許  
同年十二月刻成

定價三十錢

原著者

岡山縣士族  
森下景端

東京府本所區横網町二丁目  
土番地寄留

廣島縣士族

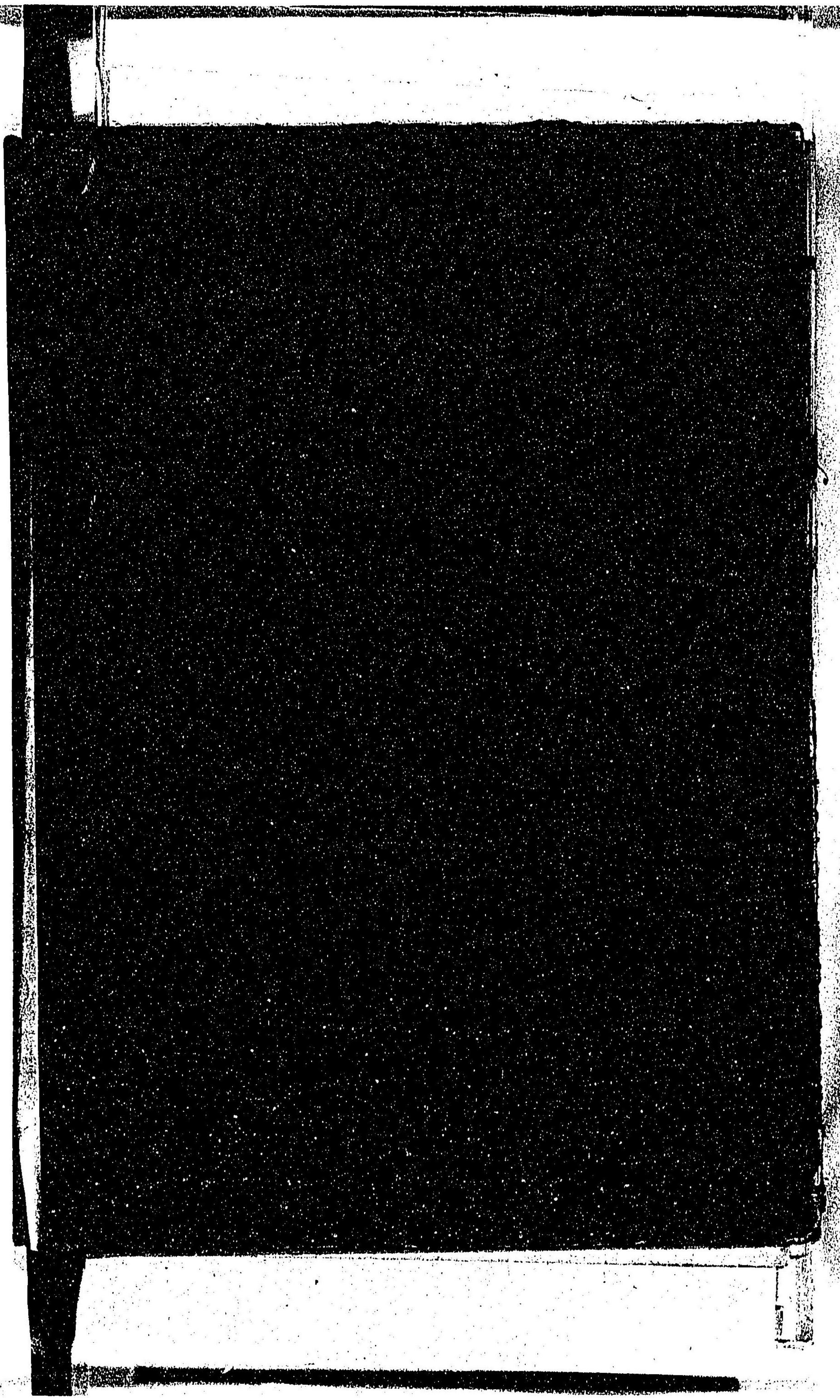
註釋人  
片岡正占

岡山縣備前國御野郡東古松村  
五番地寄留

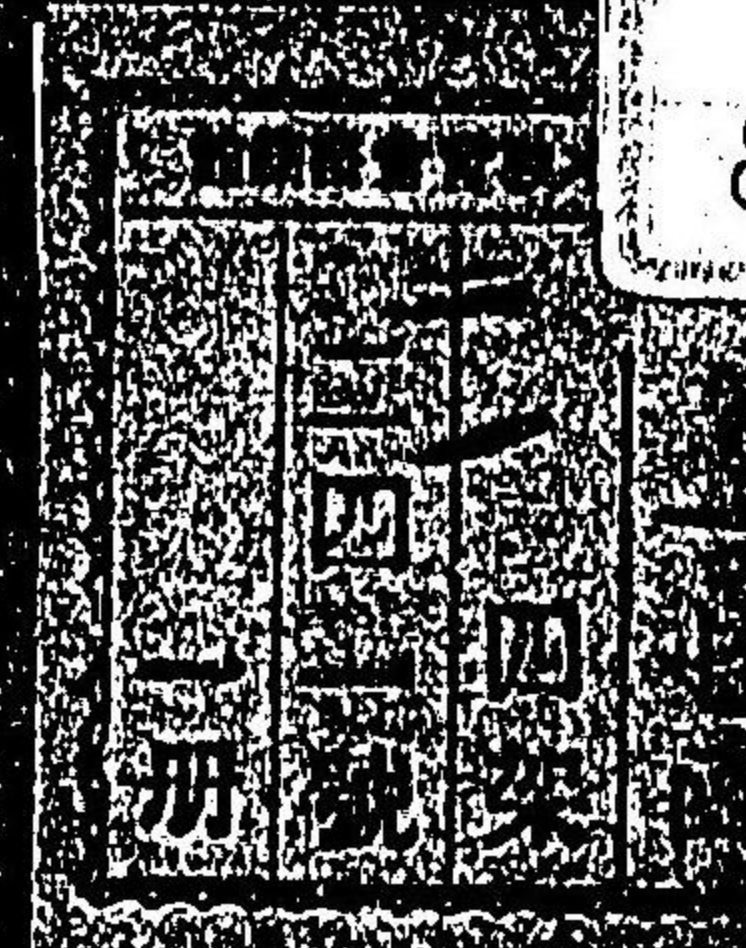
岡山縣平民

出版人  
葉浦平八郎

岡山縣備前國御野郡上中野村  
十六番地寄留



特35  
861



神理概論俚諺解

014291-000-9

特35-861

神理概論俚諺解

片岡 正占/注

M17

ABB-0633

